

地域情報（県別）

【埼玉】多職種が専門外来を担い、親子をトータルにサポート-若林大樹・医療法人社団Sunny理事長に聞く◆Vol.2

4つのクリニックとも病児保育室を整備、地域と職員に貢献

2025年3月7日（金）配信 m3.com地域版

埼玉県と東京都で4つの小児科クリニックを運営する医療法人社団Sunny（埼玉県川口市）。同法人は開業した2020年から年中無休、365日にわたって診療を続けているほか、全てのクリニックで病児保育室を備える。薬剤師や助産師、管理栄養士などの多職種が在籍し、それぞれが専門外来を担当。「共働き世帯を支えるために」と話す若林大樹理事長に、病児保育室開設の経緯と多職種の活躍について聞いた。（2025年1月24日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら



若林大樹氏（法人ホームページから引用）

——医療法人社団Sunnyが運営する4つのクリニックではいずれも病児保育室を備えています。これも、年中無休の診療に並ぶ特徴だと思います。

病児保育室の開設・運営は365日診療と同様、自分の責務だと感じていました。「共働き中心の若い世代がしっかりと働きつつ、安心して子どもを育てられるようにするにはどうすればいいか」——。小児科開業医としてのテーマを実現するための方法として、365日診療や予防接種・健診の時間指定を設けない体制をつくり、さらに地域の親御さんが病気になった子を預けられる環境もつくりたいと考えていました。

2020年の開業時からこんな思いを抱いていた中、時機の巡り合わせがありました。川口市が、市内に病児保育室が2つしかない状況を問題視して運営する医療機関を公募したのです。私たちはすぐに手を挙げ、市の協力を得られることになりました。現在、当法人で運営している病児保育室4つのうち3つはクリニックに併設していますが、2022年の最初に開設した施設は自分で本院近くのテナントを探して契約し、内装を検討しました。

「利益はクリニックで出せばいい」病児保育は地域貢献

——病児保育室について、採算性の低さを運営の課題に挙げる医師もいます。

当法人の場合、川口市の2つの病児保育室は市の補助を受けているので採算が取れていますが、武蔵浦和院と府中院の施設は自主運営のため、事業単体で利益は出ていません。確かに、採算だけを考えると「赤字だから」と二の足を踏むケースがあるかもしれませんが、利益はクリニックが出し、それを「病児保育」という地域貢献に充てれば良いのではないかと私は考えています。利益を寄付している企業と同じイメージです。

それに、病児保育室の運営は地域だけでなく職員への貢献も考えてのことです。当法人の職員は優先的に病児保育室を使えるようにしているんですね。子どもが病気になったときに自宅で看病するのか、施設に預けて働くのかを選ぶ自由があることは、地域とスタッフ双方にとって大きいのではないのでしょうか。



病児保育室Sunny（戸塚安行院）の内観（法人ホームページから引用）

——病児保育室を設けることで、クリニックの運営にもポジティブな影響はあるのでしょうか。

あると思います。本院の近くに開設したときは開業して2年後だったので既存の患者さんが知って利用してくれることが多かったのですが、開院時から併設していた武蔵浦和院と府中院では、「病児保育があるから」と初診の予約をされて、その後も通ってくれるケースがとても多い状況です。年中無休で医療受診ができて、有事には子どもを預けることもできる——。やはり、地域の方は安心しやすいのではないのでしょうか。利用自体のニーズも高く、川口市の2施設は年間1200人ほどが利用されており、2024年度はおそらく1600人ほどに達すると思われます。

看護師のフォローで医師が診られる患者も増加

——過去の記事によると、同法人には薬剤師、助産師、管理栄養士が在籍し、多職種が活躍しているといいます。

共働き世帯の悩みをトータルに解決したいと、多職種が専門外来に携わっています。薬剤師が薬の塗り方や洗い方などを伝える「スキンケア外来」を、助産師が育児の相談に対応する「助産師外来」を、そして、管理栄養士が離乳食などについてアドバイスする「栄養外来」を担当しています。職種間での学びも重視しており、当法人ではアレルギー疾患の治療について専門的な知識を持つ人を認定する資格「CAI（アレルギー疾患療養指導士）」を取得する看護師が増えており、将来的には看護師も詳しいスキンケア指導ができるよう、薬剤師と一緒に学んでいます。

もちろん、看護師の存在も重要です。365日の診療を継続していくには非常勤医の診療が増えていくだろうと開業前から予想されたため、看護師がしっかりと診療をフォローできる体制をつくろうと努めてきました。当法人では多職種が医師の考え方を学ぶ場を定期的に設けており、診察室の外で患者さんと向き合い、支えられるようにしています。例えば、看護師が診療後に軟膏の塗り方や塗る量などの使用法を具体的に伝えたり、風邪や喘息、胃腸炎、便秘などの各疾患に対して看護面から見た自宅での過ごし方をアドバイスしたりしています。また、再診の必要はないものの気になる患者さんを医師と看護師でピックアップして、診療の翌日や2日後に電話で様子を尋ねることもしていました。

このように看護師が診察前後のフォローをすることで、医師も医学的な説明に集中でき、医療の質を担保しながら短時間でより多くの患者さんを診られる可能性が高まりますし、看護師のやりがい醸成にも寄与すると思います。法人の規模が大きくなってさまざまな常勤医がバトンタッチしながら診察する機会が増えた今、看護師の育成や活躍を重視してきたのはとても良かったですね。医療の質を担保する面で生きています。

——「多職種がチームとなって患者さんを支えていこう」という価値観はどのようにして培われたのでしょうか。

「365日診療を継続するにはどうすればいいか」を考え続けていたことと、あとは私の小児科医としての経験も影響していると思います。私は勤務医時代、NICU（新生児集中治療室）で新生児の治療を専門に行っていました。NICUは看護師のケアがないと成立しません。この部門で働くうちに、「医療の責任は医師が持つけれども、医療そのものは医師と多職種が上下関係なく協力して行うもの」という価値観が培われたように思います。それが、開業医としての現在や法人の特徴にもフィットしているのではないのでしょうか。

◆若林 大樹（わかばやし・だいき）氏

2012年慶應義塾大学医学部卒。横浜国立大学市民病院での研修後、済生会宇都宮病院やSUBARU健康保険組合太田記念病院などに勤務。2020年にSunnyキッズクリニック戸塚安行院を開院。2025年1月までに埼玉県と東京都で4つの小児科クリニックを運営する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

